

「今、私の晴雨計は！」²⁹」

「デパートは

都市文化の担い手！」²

平山征夫

年齢と共に買う物がなくなつてしまつたが、それでも展覧会を覗いたり未だにデパートに行くのは好きだ。「何か素敵なものがあるかも！」というわくわく感があるからだ。その中でも「三越」は最も馴染みのデパートだ。

日銀本店とはお隣さんと言う関係で明治二十九年日銀本館完工以来の付き合いだし、日銀地下の冷房用の大貯水は三越が火事の際には消防に直ちに提供されることになっている。両方とも重

要建築物だ。本店勤務中は昼休みなど三越の中をぶらつくのが楽しみだった。広報課長の時、三越の「江戸から明治」をテーマとするイベントへの協力を頼まれ、日銀の所有している資料等を提供、説明文の作成なども手伝つたことで、一挙に親しくなつた。同時に江戸から明治にかけての日本橋界隈のことに興味を抱き調べようになつた。

その成果かもしれないが、日銀出身の写真家・幡谷紀夫氏が現役時代から撮り貯めた日銀の建物等の写真に私が職権応用（乱用と言わない）で更に撮り足して貰つた写真を加えて編集した写真集「日銀―沈黙と凝視」に「日本銀行小史」を執筆し添えさせて貰つ

た。そこには、薩長の勢力争いで決まらない二代目日銀総裁に松方正義が勝海舟に就任要請した話に始まり、三代目川田小一郎総裁の法王振り、日銀ストライキ事件と森繁久弥、本店建設に当たつての高橋是清の現場監督振りとお披露目式、日本最初の水洗トイレの水は神田川、二・二六事件で手榴弾が投げ込まれた本店中庭、開戦前夜本店からの電文が及ぼしたNY事務所員逮捕事件、戦後貴重な貨幣コレクションのGHQからの隠ぺい作戦など興味深いエピソードが満載だ。いずれ紙面を用意してご紹介しよう。

「三越」と言えば「越後屋」だ。その名の由来も「三井越後屋」が縮まったもの。以前から新潟を表

す越後との関係はあるのか、また「ふっふっ越後屋お主も悪よのう！」というあの時代劇の名セリフは何故越後屋なのか、と言う疑問を持っていた。前者については、武士を捨て町人になり松阪で質屋や酒・味噌の商いを始めたのが六代目三井高俊、その父高安の官位が越後守だったことからその店が「越後殿の酒屋」と呼ばれた。それを受けて、高俊の子で「三井家の家祖」となる高利が「越後屋」を屋号としたというもの。これだと新潟とは何の縁もないことになるが、商才に長けた高利は江戸で呉服屋を開業するのに、高級織物の産地である越後に因んだ屋号にすることでイメージ戦略を狙つた、という説もある。こちら

だと新潟と関係する。後者についてはなかなか根拠は明らかではないようで、多少納得性があつたのは「江戸を舞台にした時代劇で、悪者に徳川家に近い三河屋や尾張屋は使えなかったからでしょう」という説明ぐらい。ついでに言えば、同じようにこのことが気になったある人は、TVの主な時代劇を一年間チェック、何度このセリフが出てくるか調べたが、意外に少なく一度しかなかったそう。このセリフが有名になったのは、むしろお笑いやバライティ番組で使われたせいのような。勿論悪役演技も影響しているかもしれない。

パートは必要」という事を言いたかつたのだ。小林百貨店は名前や経営者は変わったが、古町と言う場所に一一〇年存在してきた。一貫して果たしてきたその役割は「都市文化の創造拠点」だったのではなからうか。私は大学で「地域経営論」という授業を行っている。学生に接するのが楽しいからだが、授業の演習やテストの小論文テーマに毎年「古町の活性化策を問う」というのを挙げている。若者らしい斬新な提言が出てくるので、楽しみにしている。

ころから信濃川に車の通らない橋を架け、お店・屋台・大道芸人・ストリートパフォーマーなど自由に参加できるようにし、古町と万代を繋げる、信濃川の支流を掘って店も並ぶ親水空間を創るなどなど。「食の陣」や「古町ドン」もマンネリだし、来た人はイベントだけ見て商店に入らないという指摘もある。それらを打破するには……。

物質文明の担い手としてずっと商店街の中心にあつて良品を売ってきたデパートが郊外型大型店に車の便利さと品揃えで客を奪われ、全国の地方都市で閉店が相次いでいる。成熟社会でモノ離れする中高年にこれまでのやり方は通用しない。代わりに何を売るのか。幸い街の中心にあるデパートは、歩いて行けるので、お酒も飲める。中高年(特に女性)が求めているものは何だろうと考えてみた。

これからは「精神文明」時代、その提供の担い手としてデパートは多様な文化を売ったらどうだろう。種々の文化を創造し、販売する場にデパートを創り変えようというのだ。三越劇場などで既にやっていることでもある。音楽や絵画、文学などの講座と生涯教育、芝居や演芸、アニメなど映像と漫画、スポーツと体力クリニック、健康管理、疑似海外旅行と異文化体験など統合型都市文化提供のメッカになったらと空想している。併せて、中心市街地は

話しが随分脇道に行ってしまったが、今回の本論は「都市にデ

もっと美しく快適な都市空間に衣替えしなくてはならないだろうが、今回はこのことは触れない。

柏崎の小学六年生が今どこに修学旅行に行っているか知らないが、もし新潟市に来るならば、私が関わった朱鷺メッセの展望室から日本海を望み、ビッグスワンでアルビの試合を見て将来のサッカー選手を夢見て、最後に三越新潟で二、〇〇〇円の小遣いで何を買おうか迷い、生まれて始めて生の「落語」を聞いた、あるいは「ミュージカル」を見たとしたら、一生忘れないだろう。

ここまで書いてきたら、突然六〇年前の修学旅行の記憶がパッとよみがえってきた。港めぐりも日報の印刷工場も見ているのだ。

先生に付添いで残るよう言われて残ったとばかり思っていたが……。旅館の人が「私たちが責任を持って診ていきますから」でも言ってくれたのだろうか。冒頭に戻って訂正だ！良く見たが萬代橋のたもとの記念写真にはK君は写っていないかった。

(平成二十九年四月二十八日)